

まとめ

今年2月多量の「恵方巻き」を廃棄する報道があり、話題になった。まだ食べられるのに捨てられている食べ物「食品ロス」が、日本では年間646万トンある。(平成27年度推計・農林水産省・環境省より)日本人一人あたりの「食品ロス」は年間51kgあり、これは年間一人あたりの米の消費量に相当する。そこで、「食品ロス」についてどのくらい知っているか、また削減するにはどのようにしたらよいか、松山市民20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳以上各100人、計500人を対象に意識調査を行なった。

問1、「食品ロスという言葉を知っているか」と尋ねると全体で約90%の人が知っていると言った。言葉の意味を知っている人は、68%で、20歳代が47%と半数以下であった。近年話題になっており、認知度は高い。

問2、「まだ食べられるのに、食品を捨てたことがあるか」と尋ねると、全体で76%の人がいると言った。年代別では、20歳代、30歳代が80%をこえ、60歳以上64%で最も少なかった。

問2-1、「捨てた食品はどのようなものか」(複数回答)と尋ねると全体では、おかず(副食)が最も多く、次に主食(ご飯、パン、めん類)、野菜・果物、肉・魚と生ものが多かった。年代別でも、食生活に違いがあるようだが、同じ傾向だった。

問2-2、「なぜ、食品を捨てたのか」(複数回答)と尋ねると、全体では、傷ませたが最も多く、次に食べ残した、消費期限が切れていた、賞味期限が切れていた、と言った人が多く、年代別でも同じ傾向であった。

問3、「食品ロスの内、家庭から廃棄されるのは年間どのくらいか」と尋ねると約半数量、家庭から廃棄されていると理解している人が45%であった。

問4、「食品ロスを削減するためにできることは何か」(複数回答)と尋ねると全体では、買い物前に冷蔵庫の中身を確認と言った人が最も多く、次に残っている材料から使う、食べきれない量を調理する、献立を考えて使う分だけ買う、食材を食べきるという回答であった。年齢別でも同じような傾向であった。

問5、「飲食店で食べ残したことがあるか」と尋ねると、全体で65%の人がいると言った。年齢別では、30歳代、40歳代が70%を超え、最も少ないのは60歳以上58%であった。

問5-1、「なぜ、食べ残したか」と尋ねると、全体で量が多かったと半数以上の人が答え、次に苦手な食べ物があった、美味しくなかった、食べる時間がなかったと言った。年齢別でも同じ傾向であった。

問6、「3010運動を知っているか」と尋ねると、74%の人が知らないと言った。年齢別でも同じく知らないと言った人が多かった。

問7、「食品ロスについてご意見をお聞かせ下さい」と尋ねると各年代からたくさんのご意見をいただき、関心の高いことがよく分かった。

今年5月、「食品ロスの削減の推進に関する法律」（略称 食品ロス削減推進法）が公布され、10月より施行された。現在、まだ食べられるのに捨てられる食品ロス量は家庭と事業者でおおむね半々の量である。食品メーカーや小売業者は、賞味期限表示を年月表示に変更し、食品の納品期限や、販売期限を見直すなど、食品ロス削減に取り組み始めている。私たち、消費者も食品を買いすぎない、料理を作りすぎない、買い物前に冷蔵庫をチェックするなど、「もったいない」の言葉を心にして、削減に取り組みたいと思う。そして、食品を購入する際に過度の鮮度志向をあらためて、すぐ使うものは食品の期限の近いものから購入するなど、期限切れ廃棄食品の削減に協力すると共に、私たち、消費者の一人一人の意識を改革することで食品ロス削減に取り組まなければいけないと思う。